

チョッケイさん、ご苦労さん

昭和30年卒 吉川 禎 一

今年の年賀状に、「チョッケイさんが、居なくなり大きな空洞が出来たようで、寂しい限りです」と書き込みましたが、こんなに早く書くとは思いませんでした。

彼との出会いは、昭和27年(1952)の春、学連及び同志社航空部が再開され、早速入部した時に始まる。小生2回生、チョッケイ1回生、お互い第1回の玉水での合宿以来全合宿に、また、青野ヶ原での指導者講習会にも応援参加し、殆ど同じ班で昭和29年(1954)共に戦後初のグライダーライセンスを取り、更に秋の日本一周飛行にも参加する。その間、関西支部第1回競技会でチョッケイさん優勝す。(翌年第2回も優勝)。

昭和30年小生卒後、彼は残りの1年で、飛行機曳航と頂点に進む。当時関西支部で飛行機曳航を許されていたのは、彼と関学の安田、亘理の3名だけで卒業前の昭和31年3月、徳島—高松、100 Kmの野外曳航を行い、成功させる。

卒業後、学連の職員となり、以降定年迄、本格的に教官の道に進出し、学連にどっぷりと埋まることとなる。その後暫く彼との接触が無かったが、小生昭和32年夏、転勤で大阪→名古屋へ。

昭和30年に東海支部が発足し、各務ヶ原航空自衛隊基地で初級機練習が始まり、牧野伊兵衛さんの下、教官として登場する。更に東海支部を指導するため、彼も名古屋に転勤して来て、再び会う機会が増え、夜な夜な巷を徘徊することとなる。そして、昭和34年の伊勢湾台風を共に体験する。

その後お互いに忙しくなり、会う機会が減る。学連の方は、昭和34年財団法人となり、その年、八尾にトップガンとも云える中央研究所が開設される。昭和36年第1回滑空記録会(生駒)、昭和37年飛行機班誕生、昭和41年福井空港での飛行機曳航

開始等々でチョッケイさんも益々忙しい日々を送ることとなる。

昭和54年、飛行機曳航10000回突破の表彰を受けるも、福井の合宿を覗くと、食事以外は終日曳航機に搭乗しっぱなしで、タバコも吸えない状況で、よく体がもつなあと感じたものです。

昭和49年、関西東海支部の専用滑空場として、木曾川に滑走路と宿舍が稼動するが、その発足下準備のため、地元の国会議員、建設省、関連町村の有力者等の一つ一つ精力的に働きかけていた。

平成4年、定年で訓練部長の要職を引退する。チョッケイさんご苦労さんがOBを中心に関西、東海支部で行われ、両支部多数集まり大変盛大であった。更に翌5年、FAI(国際航空連盟)より、「学生航空活動及びグライダースポーツ全般の健全な発展を支え、その普及、振興に貢献した」とのことで、スポーツメダルと感謝状を授与されました。エアースポーツメダルは、日本滑空界初の受賞とのこと。

平成8年、60周年行事の一環として、ハトK-14、H-23Cを3年がかりで復元する時、彼も毎回格納庫に現れ、定年後も止まっていない。

同志社大学航空部卒業後、日本学生航空連盟職員となり、現場の総指揮官、訓練部長として東奔西走の一生でした。チョッケイさんの一生イコール戦後の学連の歴史そのものでした。

今まで、或る日突然「ただ今」と云って小生宅に現れ、「チョッケイ」、「テーヤン」と呼び合い、酒盛りになったのですが、それが無くなったのかと思うと、またまた寂しさが込み上げてくる。

動の一生、これからは安らかに、ゆっくりと休んで下さい。そして、空の上から我々を見守って下さい。

翔友会の皆様へ

故北尾直敬氏御令室 北尾洋子

4月5日、雨の中同志社キャンパスに赴きました。

入り口のすぐそばにカバーをかけられたグライダーが展示され、学生さんの人影もなく、散り始めた桜と一緒に雨に打たれていました。

私は、グライダーってこんなに大きかったかな、こんなに立派だったかな、こんなに軽やかだったかな、こんなに静かだったかな、夫はずっとこれに乗り続けていたんだと思いつつ、一回り、二回りして、あきずに眺めていました。

今春も新入部員の方々がグライダースポーツを目指されることでしょうか。楽しく、安全に、よい思い出になるように飛んで頂きたいものです。

同志社のOBとして、学連のOB教官として皆様とご一緒する機会には永遠に失われましたが、気持ちちは皆様の心にも、私の心にもずっと受け継がれています。

入院中には多くの方々から、お見舞いや励ましのお声をかけていただき、本人も頑張りましたが、再起はなりませんでした。残念だったと、今でも涙することがあります。

通夜、告別式には、翔友会の皆様から格別のお心遣いを賜り、誠にありがとうございました。いちいち御礼申し上げるべきところ、失礼いたしておりますが、お許しくださいませ。この誌面をお借りして、皆々様にあらためて厚く御礼申し上げます。

「方向舵」に掲載して頂いた、思い出の一部不十分で意を尽くしていない文ですが、編集長のご好意に甘えて、同志社の方々にお目にとめて頂ければ幸いです。

同志社大学航空部とOB会の皆々様のご健勝と、益々の発展を心からお祈りしています。

平成18年4月吉日

空を友、雲を師として50年

(方向舵122号から転載)

北尾洋子

大空をグライダー一筋に生きた直敬さん、定年退職後は囑託として5年間、その後も耐空検査員、評議員、名誉監督など、ずーと学連との繋がりを保ち続けていましたが、人生卒業の日を迎え、2005年10月3日、(東西ドイツ統一の日)日の出と共に天に召されました。

初ソロの感想は？

索はいつはずしますか？

地上との交信は何チャンネルにしますか？

フライトの記録は何処に残しますか？

風の具合は？ 雲の量は？

うまくテルミックをつかみましたか？

いつ目的地に着きますか？

何処へ着地しますか？

尋ねたいことが山ほどあっても、もう答えは返ってきません。

方向舵を手にして頂く現役の方々の親御さんや、もっと上の世代の頃から学連教官を続け、学生の皆さんと接してきました。

滑空場の開発や維持管理、航空局との折衝、地元の方々とのお付き合い、誰とでもすぐ親くなる特殊技能の持ち主で、飲み屋で、街で、お店で、すぐ友達を作ってしまう。大きな友達の輪でした。良くも悪くも昭和一桁世代、親しくなれば面倒見がいいのですが、筋の通らないことは受け付けず、誰彼なしに噛み付きました。

「何か悪口が聞こえるでー」

「犬やないでー、美味ないもんが噛めるかい」

「相手はちゃんと見てるでー」

訓練中は大変厳しかったと聞きます。「命失うんと、怒鳴られるんとどっちがええんや」と云うのが口癖で、学生さんのためにならないことには妥協無しでした。

50年余りのグライダー人生、半世紀以上にわたります。私も40年間ご一緒しました。雲の上で昔のお仲間にあえたでしょうか。思いがけず先に到着していた方々に、「よー、先輩」と云っている姿が目に見えるようです。学連関係の方々だけで無く、昨年は同級生や近隣の方、身近な方など引き連れて(または連れ出されたのかも)他界された方が多かったのは、気のせいでしょうか。賑やかなことが好きだったから、向こうで酒盛りをしているか、この号が出る頃には滑空場でお花見を楽しんでいるのかな。

自分の子供以上に可愛がって育てた滑空場です。木曽川の土筆、菜の花、桜、しじみはこれから、鴨はもうシーズンオフです。家にいるより出張の

方が多く、宅急便の無い時代、洗濯物のギッシリ詰まった大きなバッグを担いで往復していましたが、何時しか車になりました。定年記念に買った赤いフォルクスワーゲンも、入院と同時に行って待っています。

滑空場があり、そこにグライダーが飛んでいる限り、直敬さんは安全第一の教えと共に、学生さんと一緒に笑い、怒り、泣き、飛び続けることを希って、学連への思いを後輩に託し、後は任せたと肩をたたいて励ましていることでしょう。

「グライダー人生ありがとう」

「学連がんばれ」

「天翔院専誉光雲敬順居士が見守っているぞ」

〈人生の卒業式〉告別式、お通夜にはたくさんの方々にお越しいただき、ご厚情のほど、誠にありがとうございました。誌面をお借りして心から御礼申し上げますと共に、グライダースポーツを楽しむ学生さんの安全と、学連のますますの発展をお祈りします。

合掌

